

中村 文子
初午に友と遊びしうふすなの昔の梅は今か咲くらむ

有賀 晴子

はつうまの祭にきはふ森かけの稻荷のみまへ梅咲きにほふ

市田 豊子

月寒く梅か香かなる畑道を折枝さけてゆく法師かな

木山 銚子

ゆけとく梅さかりなりいつこにも春のいたらぬ里やながらん

長谷部 和子

垣ゆひしあるしばうせて里の子のかさしとなりぬ紅梅の花

四谷 朝子

梅の花うつしうましより都なる友もよひけり此山里に

池谷 久子

月の瀬の道の行手の里つゝきにほひゆかしく梅か香をす

関屋 愛子

幼児のいたかれなから手巻のへて一花つみぬ紅梅のはな

西方 鐵子

玉ほこの道のかたへの梅の花しばし旅人の心れきらふ

金井 繁子

紙のへてうつし見んかな文机のかさしの梅のあまりに清き

田中 千嘉子

賣家の庭せまふして紅梅の主まぢ顔にほころひにけり

原田 信子

汝が友の庭の紅梅花さきぬいさ鷲にあひにとひ來よ

岩本 美玖子

春の日を背中にあひて物ぬへるおうな宿の梅さかりなり

岡田 文子

一村に春の日みちて梅さけりかしこの軒もこの川へも

鈴木 安子

わか宿の一木の梅の花の香に思ひこそやれ月の瀬のやま

羽田 晴子

みさり子の笑み初めたる朝より園生の梅もえみ初めけり

佐々木 雪子

幼子のいたつきまたくいえしより

あけたる窓の梅さきにけり

佐々木 信綱

峰の八峰里の七里咲つゝく

梅の中ゆく谷川の水

或人の結婚の折に 静子

常盤なる松の二葉の若みとり

ふかきちさりは千代もかはらし

別れし友の許に 同

